

とでしようから」とキリスト教研究所の所員へのお誘いを受けた。

幼稚園のころから教会学校に通い、キリスト教主義の学校で長い年月を過ごしてきたものの、正直に言って戸惑いを隠せなかった。自分の研究（社会心理学）とキリスト教の関わりについては全くと言っていいほど考えてこなかったし、今や毎日曜日に教会へ出かける娘を見送ることの方が多くなっている私に、所員の資格があるのかと悩んでしまった。

生活の中で聖書を読み祈ることで信仰を持ち続けてきたと自分では思っているものの、反面、礼拝を守りキリスト教と真剣に向き合っているつも生活をしているキリスト者と比較して、いい加減な自分にいつも後ろめたさを感じていた。自分の意志で手に入れた信仰とちがって、すでに環境として備わっていたため何となくいつの間にか自分の中にしみこんでいるような気がしているだけの信仰は本当の信仰ではないのではないかと、劣等感を感じることも多かった。

でも、心のどこかでは、「幼いときからの信仰は柳の木のようなもの。樫の木のように強くたくましいものではないが、どんなに強い嵐が来て枝が揺れようとも決して倒れない」と中学校の先生に言っていた言葉をうれしく思っていて、いつまでも覚えている。

そんな私が所員として加えていただき何ができるのか、不安と心配の気持ちでいっぱいである。

「優等生」のキリスト者の所員の方々の中で、「劣等生」の私は、

New Members

はじめまして

宮田加久子

昨年の春から明治学院大に勤務し始め、チャペルや賛美歌に何となく懐かしさと心地よさを感じながら1年を過ごした頃、はからずも同じ社会学部の濱野先生から「もう明治学院大学にも慣れたこ

身の置き所がないような感じもする。しかしながら、キリスト教主義教育の中で悩む私のような生徒がたくさんいることを覚え、教員というより生徒の立場からキリスト教主義教育の在り方をみなさんと一緒に考えて行くことができるかもしれないと思うようになった。

こんな「劣等生」の所員だが、今後ともよろしくご指導いただきたくお願いするしだいである。

(みやた かくこ

所員、社会学部教授)